

## JICAの現場から ⑤

ハート・オブ・アフリカー。誇り高く人々は自国のことをそう呼ぶ。日本の安全保障にとっても重要なシーレーンである紅海を擁し、中東アラブとアフリカの結節点に位置する人口4000万強の大国。親日派が多く、ホスピタリティー溢(あふ)れるアフリカ大陸のハート。それがスーダンだ。

◇

JICAはスーダンで、母子保健、上水道など多岐にわたる開発協力を実施中だが、近年、特に注力するのが農業だ。2011年の南スーダン独立で石油収入の7割を失った同国にとって、農業は経済成長と社会安定の要所だ。ナイル河沿いの広大な農業地域では、ゴマやガムアラビックなどアフリカでも有数とされる農業・畜産が展開される。グローバル市場との関係も深く、特に中東アラブ・イスラム圏ではハラール肉などの供給源として欠かせない存在だ。

その一方で、課題も多い。アラブなどからの投資には一次産品をそのまま自国輸入するための短期

的投機も多い。今必要なのはスーダンの比較優位性を最大化した雇用創出や産業化につながる付加価値型農業の実現であり、足腰となるかんがい施設の改修・維持管理と効率的な水利用の定着だ。日本の無償資金協力で改修したポンプかんがい受益地(リバーナイル州のアリアブ地区、キティアブ地区)では、専門家チームがこの実現に向けて奮闘中だ。

こうした取り組みを推進する上で、日本とのビジネス関係構築のニーズも高い。18年3月、日本貿易振興機構(ジェトロ)の協力を得て農業省、貿易省と「ゴマ輸出促進セミナー」を当地で開催。7月にはジェトロ主催の「国際食品・飲料展セミナー」も開かれた。常味高志ジェトロカイロ事務所長は「これまで以上に多くのスーダン企業から同食品展への参加希望が寄せられている」という。20年継続した米国経済制裁の解除や日本とのWTO二国間市場アクセス交渉なども追い風にあり、日系企業からの引き合いもある。

スーダン事務所長

たかはし まこと

高橋 亮 氏

## 付加価値型農業実現へ



優れた技術を有する日本の中小企業との連携も進行中だ。食品乾燥機メーカーの大紀産業(岡山市北区)との実証事業では、農村女性の参加や組合化を含む農村ビジネス(乾燥タマネギ)の検証や製品プロモーションを行う。農家も「日本の技術を生かした高品質な乾燥タマネギで、欧州向け輸出を再開させたい」と期待を膨らませる。

「イノベーションや共創の原点」は人と人のつながり、互いの夢や思いの連鎖である。19年8月

のアフリカ開発会議TICAD7やその先の展望をもち、スーダンを、そして日本と世界を豊かにする「三方良し」の体現のため、さまざまな関係者との信頼を力に、現場を奔走したい。(随時掲載)

【略歴】95年JICA入団。2003-07年パキスタン事務所、12-15年アフガニスタン事務所、18年3月から現職。48歳。

技術指導する大紀産業の安原宗一郎社長。純白に輝く乾燥タマネギは驚くほどに甘く、旨味が凝縮している。生産農家の反応も上々だ  
(同社提供)